

# 第17回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



一般の部 優秀賞 受賞作品

『小さな車輪の世界』

大阪府

水島 諭子

## 小さな車輪の世界

水島 諭子（みずしま ゆうこ）

「小さな車輪で、大きな世界へ」  
これが、私のキャッチコピーだ。

私は生まれつきの障がい者で、車椅子を使って生活している。私の足の代わりとなり、外の世界へ連れ出してくれるのは二つの小さな車輪だ。坂道では思うように進めず、段差の前では止まってしまふことがある。それでも、この車輪があるからこそ、私は学校へも行けたし、友達に会いに行くこともできる。

私は特別支援学校に通っていた。そこでは、同じように障がいをもつ仲間がいて、車椅子や杖も日常の一部だった。誰もが自分のペースで学び、互いに助け合う環境は、私に安心感を与えてくれた。授業では、体を動かす学習やグループワークを通して、自分の考えを伝える力や、友達と協力する楽しさを学んだ。学校では、失敗しても笑われることはなく、成功も失敗も含めてお互いを認め合うことが自然に身についていった。

けれど一歩外に出ると、視線は変わる。

「かわいそう」とささやかれることもあれば、好奇の目で見られることもある。そのギャップに戸惑いながらも、私は学んだ。人と人を隔てるのは障がいそのものではなく、「違いをどう受け止めるか」という心のあり方だと。

春には、道端に咲く小さな花に気づく。

夏には、アスファルトに立ちのぼる熱気を感じながら、セミの声に包まれて進む。

秋には、落ち葉を踏みしめる代わりにタイヤが力サリと鳴る音が季節を教えてくれる。

冬には、冷たい風が頬を刺し、吐く息が広がる。

車椅子に乗っていてこそ、私は歩いている人とは違う高さ、違う速度で世界を切り取るることができる。

もちろん不便も多い。雨の日には服が濡れてしまふし、人混みには肩や肘がぶつかるともある。

駅のエレベーターが故障していれば、行きたい場所に行けないこともある。けれど、その分、私は人の優しさに触れる機会も多い。重いドアを開けてくれる人、道を譲ってくれる人、そして一緒に笑ってくれる友人たち。小さな車輪は、私に「大きな世界」と「あたたかい人の心」を見せてくれる。

大人になった今、私は「伝える立場」として車椅子と向き合うようになった。

地元の小学校で、人権教育の授業に招かれたことがある。教室に入ると、子供たちの視線がいつせいに私の車椅子に集まった。

私は緊張しながらも笑い、「これはね、不便な道具じゃなくて、私の足なんだよ。これがあるから学校に行けるし、友達にも会える。みんなとも話せるんだ」と伝えた。すると、一人の子が「じゃあ、車椅子があるから自由なんだね」と言った。その言葉に熱くなった。そう、人権とは特別な誰かのためのものではなく誰もが自分らしく自由に生きるためにある。授業を終えるころ、子供たちが「また来てね!」と手を振ってくれたとき、私は確かに感じた。小さな車輪が、子供たちに「違いを認め合う心」を届けたのだと。

私はこのキャッチコピーを、未来への道しるべとして掲げている。  
これから先、どんな道を進むのだろう。

急な坂も、深い段差も、きつと立ち足はだかるだろう。でもそのたびに、私は車輪を回し続けたい。遠くても、止まりそうになっても、前へ。小さな一歩を重ねるうちに、やがて見える景色はきつと広がっていくはずだ。

だから私は、この言葉を胸に、これからの人生を進んで行きたい。  
「小さな車輪で、大きな世界へ」

二つの車輪がある限り、私の世界は、まだまだ広がっていく。